| 書き抜き読書ノート 104 | 2009 年 1 月 10 日 |
|---|---|

エドワード・ルース著「インド 厄介な経済大国」日経 BP 社 2008 年 10 月 27 日刊を読む

## インドの成長を考える

１．この本のタイトル(原題 In Spite of the Gods: The Strange Rise of Modern India)は、インドの強さは必ずしも宗教的伝統にだけあるのではないというネルーの主張に多少影響されている。インドの強さは活力ある民主主義のなかに見つかる。インドで民主主義が生き残っただけではなく、その文化に深く根づいたことは、大方の予想を裏切るものだった。インドの強さは多元主義の伝統のなかにも見つかる。このおかげで、暴力を必然としない社会闘争を数百年の習慣とすることができた。宗教的な根拠に基づいて国を分割したことと、その後遺症が、多くの血を流してきたことは事実だが、インドはその歴史においてヨーロッパで起こった大量殺戮に匹敵するようなものは経験してこなかった。インドの強さは知的資本とテクノロジー分野での卓越した能力のなかにも見いだすことができ、それが原動力となって、ようやくいま、国の規模に見合うような国際的地位をめざして進みつつある。

２．しかし、本書の副題が示すように、成長著しいインドの性格は風変わりで、例外的でもある。国際的舞台でようやく経済的、政治的に重要な勢力として姿を現してきた一方で、きわめて宗教的、精神的で、ある部分では迷信的な社会であり続けている。同じように、インドは大国のなかでは唯一、一定規模の中流階級が育つ前に、あるいは識字率が十分に高まる前に、完全な民主主義を発達させた国になった。これもまた、当時も今も、ほかの国には見られない現象である。

３．インド経済は広範な産業革命を経ないまま現在急速に拡大しているが、それもめずらしいことだ。その巨大な労働力はいまだに農村にとどまっている。インド経済は工場や物的生産物ではなく、主として競争力のあるサービス産業を軸に発達している。この状況は徐々に自己修正に向かっていくかもしれないが、当分の間はサービス産業が経済の中核になると思われ、その性格は英米のような先進国の成熟した経済により近い。

４．インドの成長は、その不安定で、ときには激動する政治状況を考えた場合にも、特異なものといえる。24　党の連立政権で動いている民主国家はほかにはない。小さな政党が乱立し、統制のとれない政府が、今後しばらくはインド政治の常態となるだろう。その結果として政治的腐敗と行政不信がインドの発展を遅らせるという大方の予想は、ある程度までは当たっている。それでも、イタリアに「経済は夜に成長する、政府が眠っているあいだに」という言葉があるように、この 20 年間のインドの成長率を上回るのは中国だけだった。

5．最後に、インドの成長が例外的なのは、それが国際社会から、とくにアメリカからはっきりと望まれたものであり、ある程度まで後押しされているという点だ。正しいかどうかは別として、世界の多くの国が近い将来に中国が軍事大国化することを恐れ、その対抗勢力となるのに十分な大きさをもつ同盟国は、ヒマラヤ山脈をはさんで巨大な隣国と接するインドしかないと結論してきた。インドはそうした役割を果たすべきだという意見に、ときには反発することもあるが、見かけよりは注目されることを楽しんでいるように思える。好むと好まざるとにかかわらず、中国への潜在的対抗勢力としてのインドの役割は、欧米でもどこでも、政策決定者の計算のなかでカギとなる要素になっている。おそらく地政学のチェス盤の上で、インドが握るもっとも重要な駒は、この国の拡大する核兵器庫だろう。

［コメント］

今や世界はインドを抜きにして未来を語ることができなくなった。その意味で、本著によりインドの実相をまずは「理解」することが大切と考える。

それにしても、大不況の中、本日報じられたインド第 4 の情報技術の企業であるサティアムの 1000 億円近くの粉飾決算の事件は、インド経済の信用力を毀損（きそん）するものとして残念でならない。インド版エンロン事件が世界経済に与える影響は大きい。

― 2009 年 1 月 10 日林明夫記―